第31回夏期福音特別集会（3）（伊東）
シオンの羔　永遠の福音　穀物と酒槽
――ヨハネ黙示録第14章――

１９８４年7月21日
小池辰雄

シオンの羔　新しき歌　絶対空間・絶対次元　無なるものは神の中にある　永遠の福音　存在
即使命　釣鐘大和尚　穀物と酒槽　羔羊の名　十字架で無者・聖霊で無限者　詩「羔の血を」

【ヨハネ黙示録14】

1われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名、記しあり。2われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大いなる雷霆の声のごとし。わが聞きし此の声は弾琴者の立琴を弾く音のごとし。3かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老等との前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人の他は誰も学びうる者なかりき。4彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処にまれ羔羊の往き給うところに随う。彼らは人の中より贖われて神と羔羊とのために初穂となれり。5その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。

6我また他の御使の中空を飛ぶを見たり。かれは地に住むもの、即ちもろもろの国・族・国語・民に宣べ伝えんとて永遠の福音を携え、7大声にて言う『なんじら神を畏れ、神に栄光を帰せよ、その審判のとき既に至りたればなり。汝ら天と地と海と水の源泉とを造り給いし者を拝せよ』

8ほかの第二の御使かれに随いて言う『倒れたり、倒れたり。大いなるバビロン、己が淫行より出ずる憤恚の葡萄酒をもろもろの国人に飲ませし者』

9ほかの第三の御使かれらに随い大声にて言う『もし獣とその像とを拝し、且その額あるいは手に徽章を受くる者あらば、10必ず神の怒りの酒杯に盛りたる混りなき憤恚の葡萄酒を飲み、かつ聖なる御使たち及び羔羊の前にて火と硫黄とにて苦しめらる可し。11その苦痛の煙は世々限りなく立ち昇りて、獣とその像とを拝する者また其の名の徽章を受けし者は、夜も昼も休息を得ざらん。12神の誡命とイエスを信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐は茲にあり』

13我また天より声ありて『書き記せ「今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」御霊も言いたもう「然り、彼等はその労役を止めて息まん。その

業これに随うなり』と言うを聞けり。

14また見しに、視よ、白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して、首には金の冠冕をいただき、手には利き鎌を持ちたもう。15又ほかの御使、聖所より出で雲のうえに坐したもう者にむかい、大声にて呼ばわりて『なんじの鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり』と言う。16かくて雲の上に坐したもう者、その鎌を地に入れたれば、地の穀物は刈り取られたり。

17又ほかの御使、天の聖所より出で同じく利き鎌を持てり。18又ほかの火を掌どる御使、祭壇より出で、利き鎌を持つ者にむかい大声にて呼ばわりて『なんじの利き鎌を入れて地の葡萄の樹の房を刈り収めよ、葡萄は既に熟したり』と言う。19御使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈りおさめ、神の憤恚の大いなる酒槽に投入れたり。20かくて都の外にて酒槽を践みしに、血酒槽より流れ出でて馬の轡に達くほどになり、千六百町に広がれり。

●シオンの羔

夏の特別集会は聖書講筵が四回で、音楽でいうと四楽章です。ベートーベンの「第九シンフォニー」を思い出しますが、午前は第二楽章で、少し柔らかったですが、第三楽章、大四楽章と、それぞれ非常に音が凄くなってくると思います。この第三楽章は黙示録第14章というわけです。

14章の第1節、もうこれだけでたくさんなくらいです。

1われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名、記しあり。

大変な宣言ですね。「羔」という漢字は、「羊が火に焼かれている」という字です。火に焼いて、おいしい羊は羔なんです。それで、「羔」という字ができた。漢字は世界最高の文字であると私が時々言うのは、そういうわけです。小羊というと、すぐ思いだすのはイザヤ書です。イザヤ書40章。

「9よき音信をシオンにつたうる者よ、なんじ高山にのぼれ。嘉おとずれをエルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。声を揚げておそるるなかれ。

これはみな詩です。預言書はほとんど詩なんです。しかも、パラリスムスといって、対句になっている。漢文の詩と同じです。「シオン」と言い、「エルサレム」と言い、同じことを別な言葉で言う。シオンは特に丘の気持を持った言葉です。だから、「高き山に登れ」とある。

ユダのもろもろの邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。

「視よ、汝らの神を」という言い方です。

10みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。

「能力をもちて」とは、「力あるものとして」ということ。「来りたまわん」は「来りたもう」でいい。

その腎は統治めたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。

その次です。

11**主は牧者のごとくその群をやしない、その腎にて小羊をいだき、之をその懐中にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわらかに導きたまわん。**」（イザヤ40・9～11）

文語訳でも時々、

「…たまわん」

なんて書いてあると、私は

「…たもう」

と読みたくなって、そう読んでしまう。というのは、「たまわん」と言うと、ヘタすると、

「…たもうであろう」

という意味になってしまう。「たもう」と、現在でありまた将来であることを、どっちも断定的に言う。福音の世界は絶対的現在です。それが未来であろうと、過去のことであろうと、それは絶対的現在です。聖書は古きことが書いてあるけれども、これは現在の書なんです。ドイツ語で「現在化する」（フェアゲーゲンヴェルティゲン）という言葉がありますが、正にそのとおりです。

「小羊をいだき、之をその懐中にいれて」

と、素晴らしいことです。キリストは正にそのような神さまに抱かれ、その懐の中にいた。彼の実存はそうだった。そこからものを言い、そこから行動し、そこで祈っている世界です。だから、その事態は私がよく図に書くように、

「神―キリスト―我」

という三重の内接円です。「汝、いずこに在るや」と言われたら、こういう三重の円を書いたらいい。

それから、何といっても、イザヤ書53章です。羔羊という言葉はイザヤ書から来ている。詩篇にもありますけれども。

「5**彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、**

私の「砕けの神学」はこの「砕かれ」から来たんです。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり。

完全に担いの愛、贖いの愛です。

6**われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。**7**彼はくるし**

めらるれどもみずから謙(へりく)だりて口をひらかず、屠場(ほふりば)にひかるる羔羊(こひつじ)の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。」（イザヤ53・5～7）

イザヤ書53章というのは、なんと不思議なところでしょうね。キリストのことの他に何を語っているか。キリストはこれから数百年あとに出てきた。だから、イエスはイザヤ書が非常に好きだった。新約聖書からイザヤ書をぬいてしまうと、大事なものが随分ぬけてしまう。その「羔羊」がみな「彼」と書いてある。

新約で特に「羔羊」という言葉を使っているのは、何といってもヨハネです。パウロの中には「羊」という言葉はあるけれども、「羔羊」は多分出てこなかったでしょう。

●新しき歌

1われ見しに、視よ、羔羊(こひつじ)シオンの山に立ちたもう。

もちろん、天のシオンです。羔羊はもちろんキリストのこと。神の羔羊、キリストが天のシオンの山に立ちたもう。

十四万四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名、記(しる)しあり。

キリストと神の名ということを、

「羔羊の名および羔羊の父の名」

と書いてある。

「エホバはわが牧者なり、我れ乏しきことあらじ」

という、牧者と羊の関係がエホバの神とイスラエルの民との関係です。旧約の歴史はそれで導かれている曠野の旅路です。そして、羔羊を屠って贖いとしたというのが旧約です。キリスト自身が大祭司となり、彼自身が羔羊となって、十字架に架かった。羔羊という言葉がいかに深刻な内容を持っているか。羔羊は実存と贖いと両方を持っている。羔羊の赦しと怒りということ、恕と怒です。

「十四万四千」、これは完璧な数の意味です。ヘブル書12章に、

「18汝らの近づきたるは、火の燃ゆる触り得べき山・黒雲・黒闇(くらやみ)・嵐、19ラッパの音、言の声にあらず、この声を聞きし者は此の上に言の加えられざらんことを願えり。20これ『獣すら山に触れなば、石にて撃たるべし』と命ぜられしを、彼らは忍ぶこと能わざりし故なり。21その現れしところ極めて怖(おそろ)しかりしかば、モーセは『われ甚く怖(おそ)れ戦(おのの)けり』と云えり。22されど汝らの近づきたるはシオンの山、

昔のモーセの時のとは違う。ホレブではない。

活ける神の都なる天のエルサレム、23千万(ちよろず)の御使の集会(あつまり)、天に録されたる長

子どもの教会、万民の審判主なる神、全うせられたる義人の霊魂、24新約の中保なるイエス、及びアベルの血に勝りて物言う灑の血なり、

凄いことが書いてある。

25なんじら心して語りたもう者を拒むな、もし地にて示し給いし時これを拒みし者ども遁るる事なかりしならば、況して天より示し給うとき、我ら之を退けて遁るることを得んや。26その時、その声、地を震えり、されど今は誓いて言いたもう『我なお一たび地のみならず、天をも震わん』と。

非常に黙示録的なところですね。

27此の『なお一度』とは、震われぬ物の存らんために、震わるる物すなわち造られたる物の取り除かるることを表すなり。28この故に我らは震われぬ国を受けたれば、感謝して恭敬と畏懼とをもて御心にかなう奉仕を神になすべし。29我らの神は焼き尽す火なればなり。」（ヘブル12・18～29）

「焼尽す火」とは申命記4章に出てくる言葉です。我々は「震われぬ国」を継ぐべきものであると約束されているわけです。これは活ける神の都なる天のエルサレム、シオンです。

「アベルの血に勝りて物言う灑の血」

とはキリストの血のことです。

「羔羊の名および父の名」

が額に記された。これは記されてあるけれども、私たちには見えない。外側から見えるようなものではない。霊的な字でありますから。

2われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大いなる雷霆の声のごとし。わが聞きし此の声は弾琴者の立琴を弾く音のごとし。3かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老等との前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人の他は誰も学びうる者なかりき。

「学びうる」という言い方はむしろ「聞き知る」といった方がいいかもしれません。ドイツ語の「フェァネーメン」という字にちょうど当たる字です。「新しき歌」の「新しき」というのは、「ネオス」でなくて「カイノス」が使ってあるので、決して古びない新しさがこの「新しい」という字です。新約聖書の新がそうなんです。この新は古びない。普通のものは新しくてもたいてい古びていく。けれども、これは古びなくていつまでも新しい。我々はいつまでも新人でなくてはいかん。これは常に新しい。これは大変な人たちです。新しい歌を歌っているという。

●絶対空間・絶対次元

4彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処にまれ羔羊の往き給うところに随う。

この言葉がちょっと躓きになる。「女」というものは汚れたものかと。そういう意味ではない。男女関係の乱れたようなことの全然ない人たちのことです。女は汚らわしくない。日蓮が、

「女人先ず成仏する」

と言いました。男も女も同じことです。いわゆる

「独身であるから潔い」

とかいうような妙な相対概念はもうひとつ乗り越えなければダメです。男であろうと女であろうと、独身であろうと結婚していようと、神さまの前における聖さというものは、実存の面からいう本当の意味ですから。肉体的にどうのこうのということではない。だから、女性でいえば、この言葉を使えば逆に

「男に汚されぬ者なり」

と言ったっていいわけです。人間として本当に神との関係が義しく立っているのを「聖い」という。我々の側がそれ自身として聖いの聖くないのと、そんなことではない。

「神―キリスト―我」

の関係がしっかり立っていること、それが「義」であり、また「聖、神聖」である。

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず、我が弟子となることができない」

と、キリストは烈しいことを仰った。あの場合の我というのは本当に神のうちに宿っている我です。これより他の者を愛するならばダメだと。親であろうと、妻であろうと、兄弟であろうと、先生であろうと、友人であろうと、弟子であろうと、何であろうと。この神の中の我との愛の関係は――こういう横の関係はどんなに愛したって――そういう横の相対的な愛の関係とは比較にならない、という意味です。キリストの言葉に躓かないようにしてください。

「我と汝との関係は絶対であるぞ」

ということです。絶対の関係は「神―キリスト―我」の縦の関係です。他の横の関係はみな相対関係です。この相対関係を問題にしない。この縦の関係が本当に立っているのが義であり、愛であるわけです。これが本当に立つと、この愛が、この義が横に流れていく。今まで問題にしないものを、全部これを本当の関係にしてしまう。何人いようと、人格関係というのは比較にならないから、それに対して自由な交わりができる。縦の神・キリストとの関係がはっきり立ってないとダメです。

それを誤解して、よく

「キリスト教はけしからん」

なんて思う。

「横の関係をいい加減にして親兄弟を棄てる」

ようなことを言ったり、

「福音を受けるときにはそこに紛争が起きる」

なんてことを言うから。まず波はたちますよ。けれども、この波を本当に静めるものはやはりこの波を立てたものが静めるんです。この縦の関係が平安であり、横の関係が平和である。平和はいくら整えようとしたって、それだけでは平和にならない。平安が成るためには、横の関係は問題にしない。平安が成ると横の平和がおのずから成るということです。

「彼らは女に汚されぬ者なり」

という言葉に躓かないでください。相対的な道徳的な判断や、あるいは法律的な判断は、そういう世界ではそれぞれの意味を持っています。けれども、福音の世界は、それをもうひとつ乗り越えた次元なんです、絶対空間とか絶対次元なんです。そうすると今度は、相対の世界に対して自在になってくる。本当にそれに処していくことができる。この福音は何とも不思議な世界です。ところが、キリストの

「何々すべからず、何々せよ」

という言葉があると、一生懸命でそれを拳々服膺しようとするから、くたびれてしまう。

人間の魂は相対的なもので解決ができるようにできてない。要するに、魂が絶対的な質を持っているのに、なぜ、相対でもってゴタゴタやるか、ということなんだ。一人ひとりの魂は絶対なんですから。

「一人の生命は全世界とも代えることができない」

とキリストが言ったではないですか。あの「生命」というのは「魂」という字です。

「その魂を失ったら、全世界を得るとも何の益かあらん」

と言ったのはそのことなんです。人ひとりと地球を天秤にかけて、どちらが重いかというと、キリストの言い方は、人の方が重いと言う。

「こっちが重い」

というのは、比較して言っているのではない。

「この一は絶対的な重さを持っているぞ」

ということです。我々の魂は絶対的な重さを持っている。だから、いわゆる全体主義ではない。本当の意味において個を顧みる。このキリストは、九十九匹の他の羊は放っておいて、迷える一匹の小羊を谷底まで探しに行って、それをザイルで結わえて登ってくる登山家みたいなものだ。我々一人ひとりはそのように絶対的に、天下一品に顧みられている。人間相互の関係は、なんのかんのと解決しようとしたって、この関係をぬきにしたらダメです。己を義としたり、人を審いたりする。それはダメです。そういう角度から読んでいかないとね。

「信仰うすき者よ」

とキリストが仰るものだから、

「さぁ、信仰をあつくしなくてはいかん」
と思うものだから、みな躓いてしまう。信仰は徹底的にうすくなってしまえばいい、
「信仰なんかありません。私の信仰なんか当てにならないから、止めました。あなたが持っていらっしゃる信だけをいただきます」
と。弥陀の本願の劫力という、弥陀の御もよおしによって賜りたる信ということ。親鸞の『歎異鈔』のあの消息は素晴らしい。

●無なるものは神の中にある

4 **彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処にまれ羔羊の往き給うところに随う。**

「何処にまれキリストの往き給うところに随う」
という。いずこまでも従うというのだから、全くこれは彼ら自身が羊になっている。羊飼いに導かれる羊であるし、主人に仕える僕である。そういうのが、
「わが心がない」
ということ。だから、これを無心といっている。自分の方の心がない。無心の境地です。
或るドイツ語の本を読んでいたら、
「女性はダス・イッヒ（自分）を持たない。女性という存在は、結婚すると、完全に夫のものになってしまって、ダス・イッヒがない」
と書いてあった。しかし、ある意味においては、それは真理なんです。男女同権は、社会的な存在としての意味においては結構ですけれども。聖書の方は、女性は従うもの、信頼するもの、信愛関係です。
その信愛関係の一番のものは、キリストと神さまとの関係です。キリストがそれをやっている。神さま一切で、自分は何も持ってない。言葉もない、力もない。無力、無意志、無善、無教、無言。だから、キリストは
「無者」
なんだ。「無者」と言って、なぜ、悪いんですか。これは、キリストがそうなんだから。私が発明したのでも何でもない。キリストを見て、私は言ったんだ。みなは私の「無者」というのがおかしいと思って相手にしない。結構ですよ、相手にしなくて。しかし、キリストの本質はそこにあったから、

「我を見し者は父を見しなり」

とはっきり仰った。ゼロ・無限大。その他にどこにキリストの真理があるんですか。だから、福音書のキリストを見て、神が見えない人は、いつまでたっても神が見えません。はっきり言っておきます。
これは私の言葉ですけれども、

Alles, was ist, ist aus Gott.　在るところの一切のものは神から来ている。
Etwas, was ist, ist gegen Gott.　在るところの何ものかは神に対するものである。
Nichts, was ist, ist in Gott.　在るところの無なるものは神の中にある。

どうだね、このドイツ語は名言だろ。およそ在るところの一切のものは神から来ているものである。森羅万象一切、全部被造物は、およそ在るものはすべて神から来ている。このことを忘れている。我々も神から来ている。神の似姿ということです。

在るところの「何ものか」、「サムシング」、それは神さまに反対している、神に対するものである。

在るところの「無なるもの」、「メ・オン」というもの、それは神さまの中にある。キリストは、

「在るところの無なるもの」（Nichts, was ist）

というひとです。在るけれども、キリストは何ものでもない。何ものでもない在り方をしている。それは神さまの中にあるから。姿が神の中に隠れて見えない。何ものかと思っている者はみな神さまに反対している。神を本当に見てない。神を神として本当に見るときには、自分は無いんです。

何処にまれキリストの往き給うところに随（したが）う。

という。そこには行き詰まりを知らん、そういう旅路なんです。何人で歩こうと、その先頭に立っているものはキリスト、そのしんがりに立っているものはキリストです。キリストは先頭になったりしんがりになったりして歩いている。本当の牧者だな。

「悪者が来れば、善き羊飼は羊のために己が生命を捨ててまでも守る」

と、ヨハネ伝10章に書いてある。

彼らは人の中より贖われて神と羔羊とのために初穂となれり。

と、この「十四万四千人」は「人の中より贖われて」と書いてあるでしょ。人間はすべて罪びとです。みな滅びに向かっている。けれども、贖われて甦りの生命の中に入っている。人間はみなエゴイストです。

「サタンはエゴイストである」

という言葉がゲーテの『ファウスト』の中にある。我々はみなエゴイストだから、生まれつきサタンに属している。生まれつきの我というものはエゴイストだから、死に至るまでエゴイズムがどこかにある。しかし、そのエゴイズムを完全に捕まえてしまって、それに従っていない。そういう存在が信仰に於けるところの戦い的な存在です。死に至るまで我々は戦っています。己との戦いですよ。しかし、自分の力で戦っていない。キリストの力で戦っている。それで鍛えられていくわけです。本当の信の世界は、勝利は確実であります。どんなに負けたように見えても勝っていきます。それは己にだよ。

「己自身に勝つことは最大の勝利である。己自身に勝つことは一番難しいことである」

とカントも言った。我々はそれが決定的にできないから、お釈迦さんやキリストの救いを要するわけだ。それを

「宗教は要らん」

なんてやっているのがある。やっていていいですよ、終いにどうなるか知らん。自分自身が自分を審くだけのはなしです。

5**その口に虚偽（いつわり）なし、彼らは瑕（きず）なき者なり。**

藤井先生が「真実」（信実）と仰った。

「信仰か、真実か。どうも信仰がだいぶ観念になってしまって、お題目になっているから、ぼくは真実を選ぶ」

と。ドイツのレッシングという詩人の言葉に、

「神さまが真理（ヴァールハイト）を右の手にもち、真実（ヴァールハフティッヒカイト）を左の手にもったとき、お前はどちらをとるかと問われたときに、私は真実をいただきます、真理はあなたのものです」

という言葉がある。藤井先生はそれから言ったわけではないけれども、信仰と真実のうち、真実をとった。藤井先生みたいな立派な方が「真実」というと、今度は無教会の連中が「真実、真実」と言って、真実にこだわる。そうすると人を審く、

「あいつは真実でない」

と。真実もサムシングになったらダメなんです。それは

「神に反対する」（ゲーゲン　ゴット）

なんです。だから、私は

「砕け」

と言う。砕けも人間は徹底的にできない。その砕けを賜っているのが十字架なんです。キリストは、我々がエゴイズムからぬけることができないから、

「そのエゴイズムは全部、私が十字架にかけたよ」

と言ってくださる。過去・現在・未来の私は全部、十字架に架けられて、私は無いんですよ、本質的に。相対的な私はいますけれども、絶対的な私はいないんです。そこにキリストの恩寵の聖霊が、永遠の生命がやってくる。だから、天的なエネルギーが出てくるんです。私は地上にある限り、そのことは叫んで進んでいきます。

「無は一切である」（ニッヒツ　イスト　アッレス）

なんです。

「一切か無か」（アッレス　オーダー　ニッヒツ）

ではない。この福音の世界に入ってくると、イプセンであろうと何であろうと、みなそれらの真理の限界が見えてくる。

「虚偽（いつわり）なき」というのは、自我がないんです。あるがままに自分をさらけだしている。ウ

ソをつかないということではない。あるがままの姿であるということです。

●永遠の福音

6**我また他の御使の中空（なかぞら）を飛ぶを見たり。かれは地に住むもの、即ちもろもろの国・族・国語・民に宣べ伝えんとて永遠の福音を携え、**7**大声にて言う『なんじら神を畏れ、神に栄光を帰せよ、その審判のとき既に至りたればなり。汝ら天と地と海と水の源泉とを造り給いし者を拝せよ』**

大自然を造った神さまを拝せよと。「永遠の福音」という素晴らしい言葉が出てきた。我々の賜っているのは永遠の福音です。永遠の福音は絶対無の次元です。

とにかく、自分の側はふっとんでいて無いという――無と言おうが、空と言おうがいい――そこに充満してくるところの、自由がある、生命がある、光があるというのが、この福音なんです。相手はキリストですから、細かい概念的な限定なんか要らん。キリストという存在は表現しきれない。宇宙的な存在だから。過去・現在・未来を掌握している大変な方です。

「我はアブラハムより先にありしなり」

という。だから、「永遠の福音」です。何が滅びても、この福音は滅びない、不滅の福音であります。だから、

「神を畏れ、神に栄光を帰せよ」

という。こういう言葉が表しているその内容が血となり肉とならなかったら、つまらんですよ。しかし、そうなったら、どんな事があっても、どっこいということになる。ダルマさんみたいに、いくら倒されたって必ず起き上がってくる。

8**ほかの第二の御使かれに随いて言う『倒れたり、倒れたり。大いなるバビロン、己が淫行より出ずる憤恚（いきどおり）の葡萄酒をもろもろの国人に飲ませし者』**

ローマとかバビロンとかいうのが滅亡の大都会です。東京とか、ニューヨークとか、ロンドンとかが現在のバビロンだ。

9**ほかの第三の御使かれらに随い大声にて言う『もし獣とその像とを拝し、且その額あるいは手に徽章（しるし）を受くる者あらば、**10**必ず神の怒りの酒杯（さかずき）に盛りたる混りなき憤恚（いきどおり）の葡萄酒を飲み、かつ聖なる御使たち及び羔羊の前にて火と硫黄とにて苦しめらる可（べ）し。**

そういう審判がやってくる。御怒（みいか）りにでっくわす。

11**その苦痛の煙は世々限りなく立ち昇りて、獣とその像とを拝する者また其の名の徽章（しるし）を受けし者は、夜も昼も休息を得ざらん。**12**神の誡命（いましめ）とイエスを信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐は茲（ここ）にあり』**

滅びの民と信仰の民とが対立してます。

13 **我また天より声ありて『書き記せ「今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」御霊も言いたもう「然り、彼等はその労役（はたらき）を止めて息（やす）まん。その業これに随うなり」』と言うを聞けり。**

これは不思議な言葉です。私たちはいつか必ず地上を去ります。

「主にありて死ぬ」

とあるが、本当は死なないんです。

「主にある者は、表向き死んでも死なない」

と。だから、クリスチャンの葬式は湿っぽくないはずです。

「主にある」

ということは、

「主に於て生きている」

ということ、「エン・クリスト」です。

「その業これに随う」

という。これは大事なことです。地上から天界に移される。また天界で生きています。地上においてなした業が周りのひとにズーッと伝わっていく。また、天界から、天界においてまた祈りをもって、地上にも作用してくる。本当に生きた人の業というものは続いている。私の兄貴は27歳で仆れました、天界へいってしまった。けれども、彼の死は私にとってはキリストを与えてくれた死なんです。だから、「業が従った」。私を通して、とにかく、いろいろな方々が福音に入ってこられた。これは、

「その業これに随う」

ということ。もとをただせば、小池政美なんです。27歳で仆れても、この仕事はずっと続くんです。あるいは、偉大な人の作品というものは、作品を通してどこまでも進んでいく。ゲーテだとか、ダンテとかというのは、彼らの業はいくらでも進んでいく。

また、次から次へと、お父さんから子供へ、子供から孫へと続く。信仰は決して血統的にはつながるというものではない。非連続の連続なんですけれども、そのようにして何代も信仰が伝わっていけば、これはエライことだ。しかし、身内のもので何代もつながっていくことはなかなか難しいことです、或は至難のことかも知れない。よその人には伝わっても、うちにはなかなか伝わらない。身内だの親戚だの、近いほどダメなんだ。イエスでもそうだ。

「なんだ、ナザレのイエスはこの頃、違ったことを言ったり、したりしているようだが」

なんてバカにされて、ナザレから出ていってしまった。

●存在即使命

私は山岡鉄舟（1836～1888）の死には驚嘆した。明治21年7月19日の、非常に暑い日だったそうだ。山岡鉄舟は、

「俺はもうそろそろ逝く」

と。勝海舟が訪ねてきた。鉄舟の息子が、

「お父さんはもうじき死ぬところです」

と言った。大勢の人が集まっている。ところが、鉄舟はまっ白な着物を着て袈裟をかけて、神色自若として端坐していた。勝海舟が鉄舟に言葉をかけて、

「どうですか、もうご臨終でしょうか」

んて言った。すると、鉄舟は少し目を開いて、ニッコリとして、

「よく、おいでくださいました。只今、涅槃の境地に進むところでござる」

と、苦もなく答えた。白扇を手にして、南無阿弥陀佛と称えながら、妻子眷族皆に笑顔をもってひとわたり見回しながら、そして、端然として坐ったまま臨終。しばらくの間、その坐った態勢がくずれなかったという。

「弁慶の立ち往生」

というのがあるが、彼らの士気烈々たるものがある。自若としていたり、烈々としていたり。とにかく、我々キリスト者は、

「我々は死を知らず、次の世界にこれから往くんだ」

ということです。ブラウニングの辞世の詩があるでしょ、

「私が逝くときには、皆、歓呼の声をあげて送ってくれ。倒れるは立たんがため、
曇るのは晴んがため。未だかつて敵に背を向けたことがない」

と、非常に明るい人生観で、ブラウニングは突貫していった。

そういう彼らは、そういった死者は、死んでも死なない。我々は、死してなお止まずという。死して而して後は止むではない、止まない。

「その業これに随う」

と書いてある。私たちの人生は悠久なる人生で、地上はその序曲であります。本曲は向こう側に往ってからです。

何のかんの言ったって、手島さんは、原始福音のあの大集団のやはり先頭にたってやっているよ、天界で。ところが、今の無教会は、内村先生が先頭に立って進んでいるとはちょっと言いにくいような状態だな。藤井先生は、内村先生が亡くなったら、

「内村先生の屍を乗り越えて我らは行く」

と言った。私は藤井先生の屍を乗り越えて進んでいる。あなた方も私の屍を乗り越えて進んでくれなければ困る。これが、神の歴史を展開していく所以であります。ただ墨守していてはダメです。

キリストの福音はケチ臭いものではないですから。もう限りない。

「**お前たちは私よりも大きな業をするぞ**」

とキリストは言われたではないですか。あのキリストの言葉は、

「私はお前たちの中にはいって、いよいよ大きな業をするよ」

ということなんです。そして、

「世の末までもいくぞ。サタンと戦うぞ。最後に新天新地を来たらせるぞ」

と、それが黙示録の内容なんだ。黙示録の大希望を抱いて人生を進んでいかないで、何が讃美歌かというわけです。

地上ではいくら長生きしても、大体百年までですよ。ただ長生きしたってしょうがない。

「使命がある所には生命はある」

とリビングストンが言ったけれども、皆さんは、存在即使命です。

この頃の若い者は何だというんだ。ただ就職のことを考えてみたり、どこがより俸給がいいだのと。そんなことではない。その生徒の、神さまから賜った一番大事な天賦、天から賜った才能、それを自分もお母さんもお父さんも先生もみな認識する。そして、それは神のものだから、それを仕上げていく。そこに人生の意味がある、実質がある。

13節は、

「今よりのち主にありて死ぬる死人は死なない。彼等はその労役を止めても止めない」

と書いておけばいい。

「その業は残って随うなり」

ということです。

●釣鐘大和尚

紀州の妹村光前寺（セムラコウゼン）の住職の大慶和尚は、その寺は大した寺でないものだから、いつも黒い法衣を着ていた。檀家の人たちが、この坊さんは少し気の毒だからというので、金子百両を集めた。これを持って本山にのぼって、もう少し立派な金色の法衣を買って着てくださいと言って、和尚に百両くれた。ダイケイ和尚はたいそう喜んで、さっそく京に上って行った。本山の花園妙心寺には行かない。そのまま三条通りの仏具屋へ行って、それで梵鐘を買った。梵鐘を舟に積んで戻ってきた。檀家の人たちは、和尚さんはさぞかし立派な衣を着て帰ってくるかと思っていたら、相変わらずの姿で現れた。大勢の人夫が何か担いできた。一体どうしたことかと。そしたら、

「わしが大和尚になって偉い法衣を着るかわりに、釣鐘大和尚を迎えてきたのだ。お前たちが一生懸命で集めてくれたこの百両の金は、自分の生身に立派な袈裟をつけたって何の功徳になろうか。この釣鐘大和尚を吊るすから、朝はこの釣鐘が

ゴ～ンと鳴ったときには、起きて働けゴ～ンだ。夕暮れには、それ一日が暮れたが油断はなるまいぞゴ～ンと、そういうように鳴るから、よく覚えておけ。わしが死んでも、これから百年も千年もそのようにして功徳が続くから」

と。これも、

「その業これに随うなり」

だ。要するに、何をしていらっしゃっても、私たちは地上で本当の生き方をしていけば、必ず「業これに随う」んです。我々は天界に行ってなお、祈りの世界でキリストを通じて魂の交流をする。祈りの助けをする。天界に行っても、魂だけでなくて、必ず霊体を持って成長する。

●穀物と酒槽

キリストが、

「神はアブラハム、イサク、ヤコブの活ける者の神である」

と言った。モーセ、エリヤ、エレミヤ、誰であろうと、その後の人たちであろうと、天界に送られている魂はみな全部そうです。我々もまたそのようにして、天地相応えて進んでいく、というのが本当の現実であります。

永遠の生命を与えるキリストの、この福音に来ずしてなんの音信か。ヨハネ伝の中心は何かというと、永遠の生命の音信と言ってもいいくらいです。「天国」という言葉の代わりに、ヨハネ伝は「永遠の生命」です。

「天国」「神の国」「永遠の生命」

はみな同じことです。

14 また見しに、視よ、白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して、首には金の冠冕（かんむり）をいただき、手には利（と）き鎌を持ちたもう。15 又ほかの御使、聖所より出で雲のうえに坐したもう者にむかい、大声にて呼ばわりて『なんじの鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり』と言う。16 かくて雲の上に坐したもう者、その鎌を地に入れたれば、地の穀物は刈り取られたり。

キリストの再臨のときに、神の国の民が天国に「刈り取られる」という言い方をしている。集められることです。「金の冠冕（かんむり）」という字は「ステファノス」という字です。「冠冕（かんむり）」はもちろん勝利の象徴です。

17 又ほかの御使、天の聖所より出で同じく利（と）き鎌を持てり。18 又ほかの火を掌（つかさ）どる御使、祭壇より出で、利き鎌を持つ者にむかい大声にて呼ばわりて『なんじの利き鎌を入れて地の葡萄の樹の房を刈り収めよ、葡萄は既に熟したり』と言う。19 御使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈りおさめ、神の憤恚（いきどおり）の大い

なる酒槽に投げ入れたり。20かくて都の外にて酒槽を践みしに、血酒槽より流れ出でて馬の轡に達くほどになり、千六百町に広がれり。

この場合の「葡萄」の方はいい内容ではない。葡萄の汁が身について赤くなる、というのはイザヤ書63章からきている。

「我独りにて酒槽を踏めり」

という、あれです。「穀物と酒槽」のうち「酒槽」の方はむしろ、そういった審判の方です。「1600」というのは「40」の自乗なんです。「40」は「10」掛ける「4」です。「4」は地を表して、「10」は人間を表すというようなことが書いてありましたが、大体そんなことでしょう。

●羔羊の名

この黙示録14章の中心となるのは最初のところです。

「我々が、羔羊の立っているシオンの山に招かれるところの、羔羊の名および羔羊の父の名のある市民になること」

プロテスタントであろうとカトリックであろうと、無教会であろうと幕屋であろうと召団であろうと、何であったっていい。そんなことは一切問題ない。神さまの、キリストの大きなエクレシアです。

我々が持っている一つ一つの集団というものは、これは、

「聖霊の幕屋」

です。幕屋の一番小さな構造は三角垂体の形だ。キリストの十字架の大黒柱が中心に立っている。それぞれの幕屋はそれぞれの特色を持っている。しかも、その幕屋は決して限られたところの、何か数なんてものを考えていない。しかも幕屋は破れている。破れ幕屋です。星の光や太陽の光がその中に射してくる。聖霊がこの破れ幕屋の中に入ってくる。キリストの十字架の砕けを賜り、本来破れている我々が本当にそこに神の光を、聖霊の息吹をその中に宿す。これが召団の本当の姿です。そこには「羔羊の名」が書かれる。

世界中にたくさんのいろいろな教会や何かがある。それはキリストの大きなエクレシアです。「エクレシア」とは

「召団」

と藤井先生が訳したから、我々は使っているけれども。そういう「聖霊の幕屋」は、

「キリストの幕屋」

ということ。そして、最後の新天新地の時に、

「神の幕屋」

ということになる。これは私の『無の神学』にもちょっと書いてあります。私たちは現実には、具体的に――具体性がなければダメですよ――一つ一つがそれぞれの特色を持った具体的な聖霊の幕屋です。それは「羔羊の名および神の名」――「および神の名」なんて

言わなくたっていい、

「羔羊の名」

だけでたくさんだ――羔羊の名が、キリストの名が記せられてあるところの私たち一人ひとりである。名が記せられたのは実でなければならない。というのは、私たちは羔羊なるキリストのまた羔羊なわけだ。私たち一人ひとりが

「小キリスト」

です。これはルターの言葉の中にもある。それが本当に羔羊の名を持った者です。名があるかないか、そんなことを詮索する必要はない。小キリストという実存を持っていれば、羔羊の名が記されてあるということです。

●十字架で無者・聖霊で無限者

いいですか。いろいろな事にでっくわしますね、それを相対的な判断をしているうちはダメですよ。それを必ず突き抜けて、

「どうなってもいい。マイナスは全部自分が引き受ける。まわりを皆プラスにしてしまうぞ、自分はマイナスの電気だぞ」

というようなわけで、進んでいく。そうすると、そのマイナスはもの凄い光を放つ。それが「無の実存」です。「無者」とはそのことです。

羔羊の実存は、私たちがキリストの無者となること――なることではない――無者たることを本当に自覚すること、それに気がつくことです。無者というのは賜りたる存在なんだ。自分で無者になるのではない。キリストは十字架で私たちを無者にしてくださっている。そして、聖霊でもって無限者にしてくださる。だから、この無とは、

「無即無限者、無即無量者」

ということです。私が言っている無者というのは賜りたる存在なんです。我々はなぜ、賜りたる無者からぬけて、「何者か」（エトバス、サムシング）になろうとするか。そうしたら、「神に反する」（ゲーゲン・ゴット）になってしまう。

徹底（決定？）ということは、実は自分ではできない。キリストが徹底を賜っているんです。聖霊はそういう意味において徹底的なものです。十字架も聖霊も私たちに徹底的なものなんです。この徹底的なものを賜らないで、何が信仰かということになる。だから、

「御霊なきものはキリスト者にあらず」

と、パウロがローマ書8章ではっきり言ったのはそのことです。

私は随分ひどいことを言ったりなんかするかも知れません。けれども、私はその言葉の奥の世界で、またそれからいつもどんどん展開している。昨日の我は今日の我に非ずと、展開して止まない。だから、人間小池をつかまえようとしたって、これはつかまえられない。空気みたいなものです…（異言）…。そういう展開して止まざるところの無者なんです。

これが羔羊の名をいただく。この恩寵はありがたくて、もう表現できない。だから、グーッと力がくる。

私たちはやがて来る神の国に――これは象徴的に言っているんだ、黙示録なんてものは全部象徴ですから、最後の現実はどうなるか知らんよ、これはみな暗号ですから――ヨハネが示された羔羊の山に向かって進んで行く。ダンテの煉獄よりかはるかに素晴らしい山だ。そういう山に向かって進んで行く。そして、「十四万四千」という不思議な数の中に入っている。皆さんと向こう側でもって大讃歌を歌いたい。私は黙示録第7章の終りの方を讃美歌にしたでしょ。あの『羔羊の血に』（召団讃歌A15）というのは私の讃美歌の中で非常に好きなものの一つです。あれを自分で歌っていると、私は天界にいるような気がしてならない。そのように行きましょう。

キリストも、自分で言った言葉は自分で言ったと思ってないんだ。

「これは神さまが言わせた」

と。私もそうなんです。自分で書いたものに線を引っ張ったりしている。それはみな賜りたる文字だから。何も自賛するのではない。

この群は、神さまに特別に使命をおびている群である、選ばれたるものである、選ばれたる霊のイスラエルであるということを、皆さん、本当に自覚してもらいたい。霊のイスラエルは、けなされたり除け者にされたりします。それが本当なんです。いい加減に認められるようなものではないですから。

「汝ら、すべての人に我が名の故に憎まれん」

とキリストは言われたでしょ。ことさら憎まれるわけではないけれども、そうなんだ。ところが終いには、

「やはり、あの人たちは本当だった。あの人たちの愛は本当の愛だった」

ということになるわけです。これは神の栄光が、キリストの栄光が現れているだけのはなしです。空間的にも時間的にも、宇宙を散歩しているような、また、永遠の中に呼吸しているような、そういう絶対空間、絶対次元の世界です。何か、私は身体がちょっと上へ浮きそうな気持がして困るね。

これでもって、祈り込んでいきなさいよ。祈り込むと言ったって、ただ祈り三昧のことを言っているのではない。そうしたら、何をしていても、とにかく楽しいし、力が来るし、人を助けていくし。

「私は一年に一人、どうしても救ってきてみます」

というような気魄でやってくださいよ。私は律法（おきて）は言わない。律法で言っているのではない。願いとして、そのような気魄で行きましょうというわけです。

私たちは、「羔羊（こひつじ）」という言葉が非常に不思議な言葉になってきた。キリストだけが羔羊ではない。我々自身が羔羊であるということ。そして、我々自身が本当にこの福音のため

には羔羊の怒りも持っている。羔羊の愛も持っている。羔羊の義も持っている。羔羊の光も持っている。「羔羊」という言葉がただ小さな羊という意味でなくなってしまう。何だか知らないけれども、不思議な言葉になってしまう。

どうぞ、そういうことで進んでいきます。私は、皆さんのような兄弟姉妹と一緒になって、本当に楽しくてしょうがない。これはみな一つになっているからね。

●詩「羔の血を」

召団讃歌A15「羔の血を」

（1980年10月16日作、田中穂積作曲「美しの天然」の曲で）

1　羔（こひつじ）の血を　身に浴びて
あがなわれたる　白き群
苦難（くるしみ）経たる　生涯（いのち）ゆえ
栄光（さかえ）ゆたけき　御座（みざ）の許（もと）

2　神の幕屋（まくや）の　張られたる
その天然の　霊泉に
渇（かわ）きを知らぬ　永遠（とこしえ）の
生活（いのち）たのしむ　パラダイス

3　数えつくせぬ　国民（くにたみ）の
星と散らばる　幕屋かな
類は相呼び　集りて
主のエクレシヤ　ここに成る

4　我らも地にて　聖名（みな）ゆえに
十字架を負いて　生き貫（ぬ）かん
み霊の光　身に浴びて
主のみ生命（いのち）を　身証（あかし）せん